様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

平成 ２７ 年　 ６ 月 １６ 日現在

機関番号：３４４１４
研究種目：基盤研究(C)
研究期間：2011～2014
課題番号：２３５２０９３８

研究課題名（和文）古墳時代中期・畿内中枢地域における埴輪生産組織の研究

研究課題名（英文）Research on Production System of Haniwa figurines in the Kinki Area in the Middle Kofun Period

研究代表者
犬木　努（Inuki, Tsutomu）

大阪大谷大学・文学部・教授

研究者番号：４０２７０４１７

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　3,900,000円

研究成果の概要（和文）：古墳時代中期・畿内地域における事例として百舌鳥御廟山古墳出土埴輪および久津川古墳群出土埴輪、当該期の畿内的埴輪の地方波及事例として西都原古墳出土埴輪の資料化を行うことができた。百舌鳥御廟山古墳出土埴輪については、ほぼ全ての個体を調査し、全面拓本作業を７割方終了することができた。久津川古墳群出土埴輪については、ほぼ全ての個体を調査し、ほぼ全ての個体から試料を採取し、蛍光Ｘ線分析を行った。宮崎県西都原古墳群出土埴輪については、補足実測を行い、ほぼ全ての個体について実測図作成を完了できた。以上を通じて、当該期・当該地域の埴輪生産組織の実態解明に必要な基礎調査・基礎分析を行うことができた。

研究成果の概要（英文）：In this research,I investigated Haniwa figurines excavated from Mozu Gobyo-yama Tumulus in the Osaka Prefecture,Haniwa figurines excavated from Kutsugawa Tumuli groups in the Kyoto Prefecuture, and Haniwa excavated from Saitobaru Tumuli groups in the Miyazaki Prefecture. Through these investigation,I presented foundamental data on the production system of Haniwa figurines in the Kinki area in the Middle Kofun Period.

研究分野：日本考古学

キーワード：古墳　前方後円墳　埴輪　工人　同工品　西都原　生産組織

１．研究開始当初の背景

近年の埴輪研究においては、同工品論と呼称される研究手法が大きな役割を果たしており、各地域・各時代における埴輪生産組織の解明が精力的に進められている。

とくに古墳時代後期・関東地方においては、埴輪樹立古墳が多数築造されている点および埴輪生産遺跡が多数検出されている点も相まって、上記のような分析事例が多数蓄積されている。

また、南九州においても、筆者らの研究により、同様な視点に基づく埴輪生産組織論が展開されている。

これに対して、本研究開始当初の近畿地域においては、連携研究者である廣瀬覚のほか、田中智子、加藤一郎らによる同種の研究が一部提示されていたとは言え、同工品論やハケメ・パターン論に基づく埴輪生産組織研究を具体的分析に立脚しつつ広範に進めていく段階には至っていなかったと見做し得る。

２．研究の目的

前項で述べたような近畿地域の研究状況を鑑み、古墳時代中期・近畿地方における埴輪生産組織の一端を解明することを目的とする。

具体的には、古墳時代中期・近畿地方におけるいくつかの古墳群をとりあげ、出土埴輪の詳細かつ悉皆的な分析を行うものとする。

また、古墳時代中期における畿内的埴輪が地方に波及した実例として、宮崎県西都原古墳群出土埴輪をとりあげ、埴輪生産組織の実態を同工品論の視点から解明する。

３．研究の方法

今回、近畿地域において、主要な分析対象としたのは、大阪府堺市百舌鳥御廟山古墳出土埴輪（宮内庁書陵部所蔵）、京都府城陽市久津川古墳群出土埴輪（京都府城陽市教育委員会所蔵）である。

両者とも、本研究以前から一部調査研究を遂行していたが、本研究において、本格的な調査研究に着手することとなった。

大阪府堺市百舌鳥御廟山古墳出土埴輪については、墳丘第一段目平坦面に樹立されていた円筒埴輪のうち、器壁が全周遺存する個体を選択し、それぞれ全面拓本を作成する。部分的拓本をつなぎ合わせることにより全面拓本として仕上げていく。また、突帯・透孔・刷毛目など細部の写真撮影も行っていく。

これらの作業を通じて、各円筒埴輪の製作者の異同を検討し、各製作者の保有する技術の変異幅を検討していく。

なお、百舌鳥御廟山古墳出土埴輪については、蛍光Ｘ線分析の成果が既に公表されており、その分析データとの照合も行う予定である。

一方、京都府城陽市久津川古墳群出土埴輪については、全個体の写真撮影および観察を進めるが、その前段階として、各個体から蛍光Ｘ線分析用のサンプルを採取し、三辻利一氏のご協力により、大阪大谷大学に設置されている蛍光Ｘ線分析装置による分析を行う。その上で、全個体の観察・撮影・計測を行っていく。

一方、畿内的埴輪が地方に波及した実例としての宮崎県西都原古墳群出土埴輪（宮崎県立西都原考古博物館その他所蔵）については、本研究以前から調査研究を遂行しており、撮影・図化作業はほぼ終了しているが、本研究では、一部補足調査を行うとともに、これまでの資料調査の成果を総合的に再検討することにより、西都原古墳群における埴輪生産組織の全体像および畿内地域との関係性について、具体的に分析・検討を進めていく。

４．研究成果

本研究を通じて、古墳時代中期・畿内地域における事例として、百舌鳥御廟山古墳出土埴輪および久津川古墳群出土埴輪、当該期の畿内的埴輪の地方波及事例として西都原古墳出土埴輪の資料化を行うことができた。

百舌鳥御廟山古墳出土埴輪については、宮内庁書陵部において複数回、資料調査を実施し、ほぼ全ての個体について観察し、全面拓本作業を７割方終了することができた。

また、久津川古墳群出土埴輪については、京都府城陽市教育委員会において複数回、資料調査を実施し、ほぼ全ての個体について観察を行うとともに、ほぼ全ての個体から蛍光Ｘ線分析用の試料を採取し、三辻利一氏のご協力のもと、蛍光Ｘ線分析を実施した。

一方、宮崎県西都原古墳群出土埴輪については、宮崎県立西都原考古博物館等において複数回、資料調査を実施し、図化可能なほぼ全ての個体について実測図作成作業を完了することができた。

以上の調査成果を通じて、古墳時代中期・畿内中枢地域における埴輪生産組織の実態を解明するために不可欠な基礎調査および基礎分析を行うことができたと考えている。

５．主な発表論文等

（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計１５件）

①犬木努「西都原古墳群の埴輪―「平成調査」から「大正調査」へ―」『西都原古墳群総括報告書』pp.93-114、2015 年、査読無し

②三辻利一・犬木努・近藤麻美「城陽市域の古墳・遺跡出土埴輪の蛍光Ｘ線分析―赤塚古墳・山道古墳・横道遺跡・正道遺跡・芝ヶ原遺跡―」『城陽市埋蔵文化財調査報告書第 69 集』pp.23-26、2015 年、査読無し

③犬木努「宮内庁書陵部所蔵『西都原発掘実況写真』（二）―西都原古墳群大正調査の基礎資料（２）〔その２〕―」『大阪大谷大学紀

要』第 49 号、pp.1-88、2015 年、査読無し

④三辻利一・犬木努・近藤麻美「土器遺物の K-Rb、Ca-Sr 両相関図」『志学台考古』第 15 号、pp.18-30、2015 年、査読無し

⑤犬木努「下総型埴輪の蛍光Ｘ線分析―胎土分析と埴輪生産組織論―」『埴輪研究会誌』第 18 号、pp.74-97、2014 年、査読無し

⑥三辻利一・犬木努・近藤麻美「山道東古墳出土埴輪の蛍光Ｘ線分析」『城陽市埋蔵文化財調査報告書第 67 集』pp.23-28、2014 年、査読無し

⑦犬木努「日州新聞にみる大正時代の西都原古墳群とその周辺（一）［資料篇］―西都原古墳群大正調査の基礎資料（３）〔その１〕―」『大阪大谷大学文化財研究』第 14 号、pp.21-87、2014 年、査読無し

⑧犬木努「轟俊二郎が採集した埴輪片―『埴輪研究第１冊』の原風景―」『博古研究』第 47 号、pp.9-26、2014 年、査読あり

⑨犬木努「宮内庁書陵部所蔵『西都原古墳発掘実況写真』（一）―西都原古墳群大正調査の基礎資料（２）〔その１〕―」『大阪大谷大学紀要』第 48 号、pp.1-54、2014 年、査読無し

⑩犬木努「日本における古墳葬送儀礼と埴輪について」『日韓家形土器・埴輪の比較と歴史的意義』pp.116-130、2013 年、査読無し

⑪三辻利一・犬木努・近藤麻美「梶塚古墳および車塚古墳出土埴輪の蛍光Ｘ線分析」『城陽市埋蔵文化財調査報告書第 66 集』pp.25-32、2013 年、査読無し

⑫犬木努「埴輪からみた南九州と近畿―西都原古墳群を中心として―」『南九州とヤマト王権―日向・大隅の古墳―』大阪府立近つ飛鳥博物館図録 58、pp.129-138、2012 年、査読無し

⑬三辻利一・近藤麻美・犬木努「青塚古墳および芭蕉塚古墳出土埴輪の蛍光Ｘ線分析」『城陽市埋蔵文化財調査報告書第 64 集』pp.22-29、2012 年、査読無し

⑭犬木努・近藤麻美「西都原 171 号墳出土蓋形埴輪の再検討―立ち飾り部の製作技法を中心として―」『宮崎県立西都原考古博物館研究紀要』第８号、pp.23-34、2012 年、査読無し

⑮三辻利一・犬木努・近藤麻美「統計学の手法による古代・中世土器の産地問題に関する研究（第 34 報）―畿内の古墳群出土埴輪の化学特性―」『志学台考古』第 12 号、pp.1-35、2012 年、査読なし

〔学会発表〕（計５件）

①犬木努「西都原の埴輪から何がわかるのか？―男狭穂塚・女狭穂塚の時代―」；宮崎県立西都原考古博物館講演会、2014 年８月 10 日、宮崎県立西都原考古博物館（宮崎県西都市）

②犬木努「日本における古墳葬送儀礼と埴輪について」；韓日家形土器・埴輪共同研究会、2013 年６月 15 日、韓国・国立大邱博物館（大邱（大韓民国））

③犬木努「日向の古墳時代を考える―最近の調査・研究から―」；シンポジウム「南九州とヤマト王権」、2012 年 11 月 11 日、大阪府立近つ飛鳥博物館（大阪府河南町）、

④犬木努「西都原古墳群出土埴輪の再検討―同工品／作業分担／工人編制―」；第 81 回古墳時代研究会、2012 年 11 月３日、高槻市立今城塚古代歴史館（大阪府高槻市）

⑤犬木努・近藤麻美「西都原 169・170 号墳の発掘調査」；第 81 回古墳時代研究会、2012 年 11 月３日、高槻市立今城塚古代歴史館（大阪府高槻市）

〔図書〕（計２件）

①犬木努（編）・三辻利一・近藤麻美『古墳時代中期・畿内中枢地域における埴輪生産組組織の研究』平成 23 年度～平成 26 年度科学研究費補助金 基盤研究（Ｃ）研究成果報告書、大阪大谷大学、2015 年、総頁数 48 頁（執筆箇所 pp.1-48）

②犬木努（編）・森下章司・水野敏典・清喜裕二・廣瀬覚『古墳出土品がうつし出す工房の風景―手工業生産の実像に迫る―』大阪大谷大学博物館報告書第 61 冊、大阪大谷大学博物館、2014 年、総頁数 117 頁（執筆箇所 pp.68-85）

６．研究組織

(1)研究代表者

犬木　努（INUKI, Tsutomu）
大阪大谷大学・文学部・教授
研究者番号：40270417

(2)連携研究者

廣瀬　覚（HIROSE, Satoru）
独立行政法人 国立文化財機構 奈良文化財研究所・都城発掘調査部（飛鳥・藤原地区）・主任研究員
研究者番号：30443576

(3)研究協力者

・三辻　利一（MITSUJI, Toshikazu）
奈良教育大学名誉教授・大阪大谷大学元教授
・近藤　麻美（KONDO, Mami）
大阪大谷大学大学院文学研究科研修生
・金行　美智子（KANEYUKI, Michiko）
宮崎市教育委員会